

ミツバチの 羽音と地球の回転

上映会！

500人×二回＝1000人で観よう！

私たちの去来現

鎌仲ひとみ監督来姫トークあり！

6月26日(土)

一部

13:00 開場
14:00 上映開始
16:00 トーク

二部

17:30 開場
18:30 トーク
19:00 上映開始

姫路花の北市民広場(大ホール)

主催:「ミツバチの羽音と地球の回転」実行委員会
事務局:ピースチーンはりまTEL&FAX 079-286-8551
[後援]姫路市・姫路市教育委員会

一般 前売り 1,000円 / 当日 1,300円
小中 前売り 500円 / 当日 800円
チケットあります ※託児有り(要予約)

映画「ミツバチの羽音と地球の回転」PR 山口で報告会 山口新聞4月20日

上関町の原発建設計画に向き合う祝島島民と、石油や原発エネルギーからの転換を図るスウェーデンの取り組みを描いた長編ドキュメンタリー映画「ミツバチの羽音と地球の回転」の完成報告会が19日、山口県庁であり、監督の鎌仲ひとみさん(51)らが映画をPRした。全国上映を前に、5月1日に山口市大手町の県教育会館で先行上映される。

「ここで生きていく」がテーマ。ひじき漁やビワ栽培などで生計を立て、原発計画に向き合う30代の島民男性の生活を軸に、バイオマスや波力発電など持続可能なエネルギー社会の構築を目指す外国の活動を呼応させ、エネルギーの未来をどうするのか問い掛ける作品という。



完成報告会で映画をPRする
鎌仲ひとみ監督(中央)

2008年7月から撮影を開始し、今年4月に完成。主に祝島を撮影していることから、広く県民に見てほしいと先行上映を決めた。

完成発表会で鎌仲監督は、「二酸化炭素や放射性廃棄物を出さないエネルギー源は日本にたくさんある」と指摘。「原発が持つ利点・欠点など全体的なビジョンが人々に伝わっていない。映画を通じてさまざまな情報を伝え、人々に考えてもらうきっかけになれば」と話した。今後全国500カ所での上映を目指すという

原発のこともっと知りませんか？

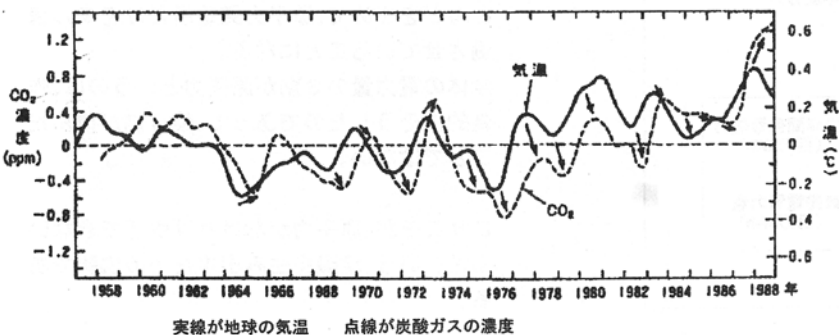
ピースチェーンはりま学集会

5 / 1 山陽教務所で聞いた長田浩昭さんのお話を2回にわたって報告します。

原子力発電から見える私たちの過去と現在と未来。これはまさに、目の前に鏡を置かれて自分の姿を凝視する時間だった。小さい国土に55基の原発。そもそも、出来るだけ地震の少ない所に建てたつもりがその後の研究で、地震が少ないのは地震エネルギーのたまっている場所だとわかったということ。地震学者が警告を出している。

発電にタービンを回すのにお湯をわかす蒸気機関車の原理。その燃料に核物質を使い、放射能汚染と大量の放射性廃棄物を出すのが原子力発電。その時大量の冷却水が必要なので海の近くに建てられる。冷却水は汚染され、7度温度が上がり毎秒数ト(河川一本分)海へと放出される。

30年間の気温と炭酸ガス濃度の推移 (1958年~1988年)

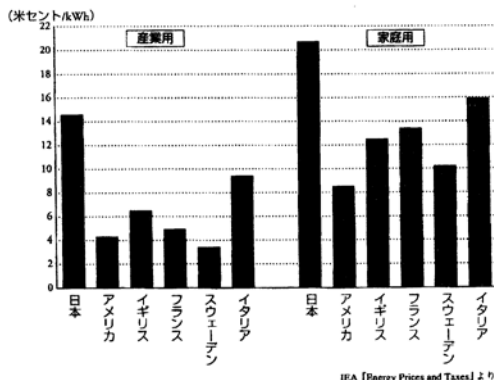


地球温暖化対策に原発は「CO₂を出さない」と言ってきたが、最近では「発電時にCO₂を出さない」に変った。ウラン採取、加工、輸送、巨大プラント等、発電時以外は大量のCO₂を出す。しかし、その前に地球温暖化の原因がCO₂だというのは原因と結果のすり替えが行なわれている。気温とCO₂の増減推移のグラフからは、気温が上がったことによって、それにとまうCO₂が発生したという事が分かる。

7

原発推進のまやかしはまだある。原発は私たちの使う電気の約三割をしめているということ。稼働率が水力、火力に比べて大変に高い。水、火力をやすませて、原発をフル稼働させているからだ。原子力がなければ私たちの生活は成り立たないという意識を作り出すための広報である。たとえ原発が止まっても、水、火力をフル稼働させれば必要な電気はまかなえる。電気は独占企業で、私たちは選ぶことができない。原発推進PR、コマーシャル、原発見学のため旅行まで、か

■ 電気料金の国際比較 (1997年)

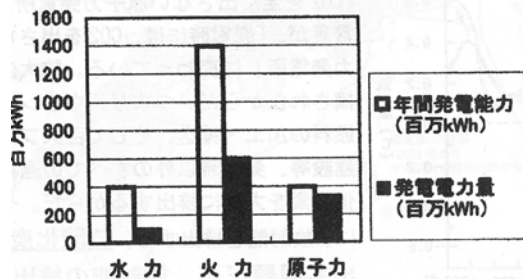


かった費用のすべては電気料金に上乗せされるので、日本の電気料金は世界一高くなっている。

ヨーロッパでは自然エネルギーの開発が進み脱原発、脱石油しつつある。でも日本はエネルギー研究開発費のほとんどを原子力につぎ込んでいる。原子力は非常に大きな利権であるということが、私たちを身動きできなくさせている。

又原発は被曝する労働者をぬきには一日たりとも動かさない。被曝量が膨大で、数分しか労働できないので、多くの労働者が狩りだされる。その数は広島・長崎の倍にも及ぶ42万人に達している。しかしそのデータを管理している放射線影響協会は、9つの電力会社と、17の原発推進事業所によって作られた財団法人で、驚くべきことに、この被曝者数にして労災認定を勝ち取ったのは十数人である。(後半に続く)

日本の電力需給の現状(1998年度分)



原発労働者の形態

